

木工研究会 漆講習会 「漆の基礎と拭き漆の技法」

開催日時：2019年7月6日（土）13：00～17：30

会場：松本市 長野県工業技術総合センター

講師：牧野弘樹（静岡県藤枝市在住）小林登（長野県朝日村在住）

参加者：46名 木工会会員 11名、一般 35名 報告者：惣洞久美子

◇ 牧野さん講義と実演

- ・木工を始めてから漆に興味を持ち、自ら漆を扱うようになるまでの経緯

木工を始めて漆へのあこがれはあったもの自分ではやらずに木曾平沢の職人さんへ依頼していたが、引越しに伴い初めて自分でやることを考えた。しかし、かぶれて挫折。その後15年位漆から離れていたが、国展で松崎融さんの「ザラザラで凸凹の漆」の作品に出会い、改めて興味が沸いた。

- ・「かぶれ」と「漆の魅力」の比重の変化

漆をやってみると相変わらず酷くかぶれたが、まず始めた「拭き漆」が、重ねるごとに目に見えて美しくなる事を体験し、夢中になる。1年経つ頃には「かぶれく楽しい嬉しい」となり、かぶれも皮膚が弱いところに着くと痒くなる程度にまで慣れた。

- ・「刷毛塗り」の挑戦から「漆+他素材」等、漆の可能性探索の楽しさを発見

かぶれにも慣れ、楽しくなったことから、刷毛塗りにも挑戦する気になり、ツルツルピカピカだけではない、思わず触ってみたいくなる様な漆をやってみたくなった。難しいと聞いていたが耳で聞くよりはやってみた方が簡単に思えた。また、サビの中に豆腐や米糊をいれて、凸凹を試してみたり、漆の可能性を感じて更に夢中になった。

- ・黒漆塗りの実演をしながら普段使っている道具や材料の紹介、体験談

生漆に鉄を溶かしこんだ液体（水+釘、鉄くず）を混ぜたこともあるが、（グレーになるが塗ると黒く見える）時間が経つと茶色く透けてきてしまうので、今は黒い粉（ベンガラ）を入れる。これを刷毛塗り×3回（塗りっぱなし+軽く研ぐ）後の仕上げに拭き漆。拭き漆はタンポで塗布（牧野さんはあまり艶々させたくない時は最後の漆にも地の粉を入れている。）全部拭き取ってしまうのではないかと思うくらい拭き取る。刷毛も拭きも（+磨き）も基本薄く7、8回、回数を重ねないとちぢれる。ただ、自分のやり方が正解というわけではないと思うので、「とにかくやってみるのが一番。」との事。

地の粉+漆：割合は量った事ないが漆が多い方が硬いのではないかと考えてやっている。

砥の粉+漆：地の粉の粒>砥の粉の粒なので、粗い下地の間に細かいのが入り良いと思う。

あくまでも自分の思い描く仕上がりを目指しているのでやり方は人それぞれにしても
らえれば良いと思っている。研ぎも同様。ただ、硬いのでたくさん研ぐのは大変。

使いかけの漆が残ったらラップで密閉して冷蔵庫で保管。次に使う時は布に包んで絞っ
てから使う。

ヘラの先の手入れとしては、使った後はきれいに拭き取る。残ってしまった時はダイヤ
モンド砥石（ホームセンターで300円）できれいにする。

◇質疑応答

Q: 一回の作業に使う量はどのくらいか

A: 目分量で勘。足りないと困るし、多いともったいない。皿だと、10枚とか、作業効
率を考える

Q: 刷毛は何で洗うか

A: サラダオイルが1番だと思う。しごいて漆を取る。あまり油が残っていると漆が乾か
なくなるので注意

Q: 乾かないとき

A: 木の質（ウォールナットやクルミなど、油が多いもの）が原因のことが多いので時間
をかけて乾かす（1か月かかることもある）また、下が完全に乾く前に次に進めるのは
ダメ。手で触ってサラっとしているか、息を吹きかけて曇ればOK。生乾きに息を吹きか
けると虹色みたいになる

Q: 乾かなかった時の考えられる原因

A: 古い漆で塩分が入っている場合。人によるが手の跡に漆がのらないこともある。汗の
塩分のせいではないかと思う。

Q: 湿度はどのくらいですか

A: 湿度は60%。工房が川の前にある事もあり、普段は湿度を上げるために特別なことは
しない。ただ、2月とかには40%まで落ちる事がある。そういう時は乾きにくい。一応
1畳の広さの「ムロ」を構造用合板8枚で作ってあるが埃除けくらいな気持ち。ちなみ
に温度は12℃もあれば乾く

Q: ウエスは何を買っていますか

A: 特に購入はせず、家にある物を色々試しているが、ウール混が調子良い。コットンは
吸い取り良すぎる。

◇小林さん講義

- ・先代からの仕事内容や最近の活動内容

2代目として先代から続いている主に無垢材の拭き漆等、依頼を受けたり最近では漆の粉や地の粉等を蒔いた手法を用いたり、剝物もやっている。35年になる。また、朝日村のクラフト体験館で色々な木材に塗る機会を頂き、幅が広がった。箸、お椀から大きいカウンターや店舗内の仕事もするようになった。

- ・木地の状態、トラブル体験やその原因

今までの体験としては木地について手や足、雨の跡、雑巾の拭き跡（汚い水を使うと残る）、剥ぎ目でのトラブル発生。基本それらを残さないことでトラブル回避になる。パテ使用に関しては使う前に要相談が良い。

- ・「木地の仕上げ」について、トラブル回避方法

ここではまず谷さんからの木地はトラブル発生が少ないので谷さんの仕上げ方をお聞きする。谷さんは木地の状態が漆を塗るとトラブルとして浮き出るので、次の事に気づけているとの事。

1. 人によっては素手で触ると跡がついてしまう人がいるので、その場合は素手は避けて、手袋を使う。
2. 胴付や木口などの接着剤のはみだしに気を付ける。接着剤によってはシンナーで拭き取る。
3. 角の面等は、水で濡らしても毛羽立たなくなるまで320番で何度も研ぐ（水拭きを10回も繰り返す場合もある）
4. 手カンナの仕上げは光にかざして見て、踊った跡などがあれば、削り直すか、サンディングでしっかり落としておく。
5. 複雑な構造の物は出来るだけバラシタ状態で塗りやすくすることを考える。もしくは相談してからやる。（扉の蝶番は外す、とか棚はそのままで良いとか）

また、小林さんは取り掛かる前に下記の事を行っているとの事。

1. 木地の表面をエアーでしっかり導管の中まできれいに飛ばす。
2. シンナーやアルコールで拭く。
3. 傷がある場合には直しておく。その場合、パテやサビで埋める場合はマスキングテープなどで回りを囲い、傷のみに使う。パテやサビを使うほどではない位の凹には漆を筆で盛って墨で平らに研いでおく。

・「拭き漆」について

木の質、軟らかいもの、硬いものによって木固め（*）を回数変えて行い、表面を固めてから拭き漆を5回で仕上げる。（テーブル面等強くしたい場合は1回多く）3回目から1000番で荒らして仕上げに入る。

*木固めとは生漆+2倍のテレピンを塗布すること。その際、漆を導管に入れてやらないと後で白く出てしまう事がある。ちなみに、テレピンの代わりに灯油だと絞まりが悪い。

拭き取りは以前は寒冷紗を使っていたが今は専用の紙（漆屋さんより購入）で拭き取っている。

初心者は拭き残しのない様にきちんと拭き取る形で回数多く重ねた方が良い。（プロの仕事としては回数を少なくして漆をどれだけ残せるかがポイントだが最後はきれいに拭き取る）テレピン油で希釈するとやりやすいが、将来劣化して、使っていて布巾等に着いてくるようになってしまうのであまりしない方が良くと思う。（小林さんは希釈しないので、作業は大変だが冬は乾きの良い漆、夏は乾きの遅い漆を使い工夫をしている）

1回の作業は拭き跡が出たりするので大体30分で終わらせるのが勝負。拭き跡が残ったら研いでやり直している。

・「ムロ」について

横に10cm間隔の棧があるムロ、下に加湿と加熱のできるマットを敷いてある。

湿度60~65%、温度20度（湿度が足りない場合は霧吹きで回りを湿らす。70~80%でも大丈夫だがそのまま温度が下がったりすると、塗った面に水分を閉じ込めて白く曇る場合もある。温度はあまり高いと導管から泡吹くこともある。ムロの隅にはあまり置かないようにしている）

・木地の「研ぎ」について

木地を持ち込む人に最後の仕上げの番手を聞いてそれ以上から始めるが、毛羽立っている木地によっては140番から始める場合もある。大体は400番から。

・「塗り」について

漆は時間が経つと透けてくるので、特に白い木（樺やセンなど）は木固めの前にステインで着色しておく。ケヤキはしない。

タンス等大きいものを塗る時はゴムマットに残っている油などをきれいにとって敷物として使っている。20分で仕上がるように考え、順番としては1、正面と底 2、横に倒し側 3、反対の側 4、天（一度にできない場合はマスキングで分けて塗る。）

本塗り前には点検して傷等を補修してから行う。

・「修復」について

大きく浅い傷→1回、生漆や朱合で全面を厚塗りし、耐水ペーパーの研ぎで木目が見えるまで調整し、拭き漆に移る。

組んだ後の隙間→サビ+漆を練ったもので穴を埋めてから拭き漆。

手指の跡で乾かなかった場合→木地の状態で直すのが良い。濡れ布等を被せ強制的に乾かす事や、漆に水を混ぜて乾きを良くしてほかす事もあるが、将来の不安が残るので、出来るだけしない方が良い。

剥ぎ面の接着材に関しては、使う前に漆を塗って大丈夫かどうかを試してみるしかない。

・ぬり実演（見本工程表、皿、曲げわっぱ）

刷毛→油を落とし、エアーで飛ばして置いたもの使用。使う前に漆を馴染ませておけばより良い。馬の毛、全通し。

ヘラ→金ヘラ

漆→精製生漆

手袋→綿手袋の上にゴム手袋

拭き取り紙→漆屋さんで購入

見本工程表→1000番の耐水ペーパーでサーっと軽くサンディング→板にたっぷり漆を出して金ベラで繊維に沿って残し気味に乗せる→繊維に直角に均す→刷毛で伸ばしてなじませる→紙でしっかり拭きとり（端は落とす）この間1分間くらい

皿（仕上げに近いもの）→漆を塗る→使い終わった紙で包みながら全面一気に拭きとり30～60秒くらい

曲げわっぱ（新しいもの）→刷毛でゴシゴシ→紙で拭きとり

片付け→漆を取り置くため（1日くらいならば）ラップを使う（メーカー品が良いと思う）→再利用時はごみを取り除くため絞って使う（使い古しの寒冷紗が良い）刷毛を食用油（新品）で色が出なくなるまで洗う（テレピン油は毛が痛むので基本使わない）

・質疑応答

Q：松の木に漆で乾かないことがあったが良い方法ないでしょうか。

A：乾かなかったことが無いのですが木固めをしたらどうでしょうか。

Q：漆購入時に中身が分離していて混ぜて使ったがよく乾かなかったが・・・

A:上の透明な物も底の固まった物もすべて漆の成分なので良く混ぜて使うと良いと思う。

Q:湿度を下げて乾かそうとした経験はありますか。

A:ないです。60%以上は保つようになっている。

Q:劣化した漆の塗り直しについて

A:傷や輪染み→削る。特にきれいな場合は1000番耐水ペーパーで軽く荒らして上から塗る場合もある。

:大きな傷→パテの上にサビ土+漆を乗せる→拭き漆

Q:漆とウレタンの見極め方

A:難しい。わからない。

Q:中国産と国産の違い

A:出来上がり状態→時間が経てばわかるが新しいうちはわからない。

使い勝手→国産は高価、しまりが悪いので乾燥に時間がかかる。中国産は安価。

Q:漆の保管場所

A:基本外に置く。冬はムロとか少し暖かいところ。

・石目塗りの説明

隅切りのお盆→精製漆の上に石目を全体に蒔く→漆+サビを練った物を刷毛（短くなってしまった硬い物）で均す→朱漆で拭き漆

朱の丸盆→漆粉を蒔く→へうで線を入れる→朱漆→拭き漆

白の小皿→珪藻土を蒔く（漆粉の代わり）→生漆を溜めた感じに残し吸い込ませる→白漆を塗りっぱなし

黒の小皿→呂色の精製した漆を塗っては拭き取るを繰り返す、茶色っぽい色で仕上げ、中は黒漆で仕上げ

◇上田さんより

・各種塗料と比べての漆について（別紙資料配布）

ウルシオールは紫外線に弱く劣化して上から痛むが他の塗料は下から痛むという特性があり、結果、漆は下まで剥ぐことなく上から補修が効くという利点がある。

また、薬品や溶剤への耐性としてウルシオールはアセトン、有機酸に少し弱い以外は他の塗料に比べ強いと言う事がわかっているので、数ある塗料の中で特に優秀な塗料と言

える。更に硬化については他の塗料が比較的早い時間に最も硬化するのに対し、漆は時間が経てば経つほど更に硬化が進むという特性もある。

感想：「完全に自己流なので」と牧野さんらしい飾らない言葉でお話しいただき。尻込みして漆に触った事のない報告者のような超初心者にも「できるかもしれない」と思わせて下さる内容でした。

また、小林さんからは35年の塗りのプロの仕事を聞かせていただき、見せてもいただき感動しました。

更に上田さんには漆の塗料としての優秀性も教えていただきもっと使ってみたいなと思いました。

ありがとうございました。

今回の漆講習会の Youtube 動画は以下でご覧になれます。

漆の基礎と拭き漆の技法（講師 小林登）

part1

<https://www.youtube.com/watch?v=6ieEUpvvgYo&t=8s>

part2

<https://www.youtube.com/watch?v=khezgC5mKoA&t=55s>

拭き漆の技法応用編（講師 牧野弘樹）

part1

https://www.youtube.com/watch?v=w6v2RG9_07k

part2

<https://www.youtube.com/watch?v=sasL003Xyms&t=44s>

漆講習会 「漆の基礎と拭き漆の技法」



牧野さんの作業実演



作品の解説



小林さんの作業実演